

コンバージョン前後の写真



①建物外観 ファサードの格子戸は陶芸教室と外部を緩やかに繋ぐ



②入口 教室内の様子が見える入口の小窓と格子戸



⑥住居玄関 オーナーの実家に眠っていた縫製台を下足入れの天板に利用



⑧リビング 無垢材を使用したフロア、建具、製作家具



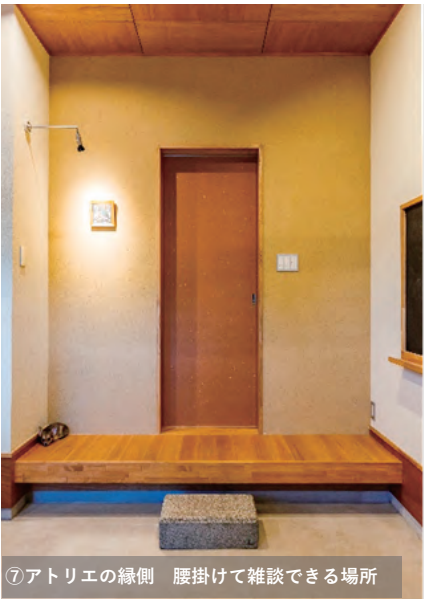
③アトリエ内部 工場の照明器具をそのまま利用 蛍光灯をLEDに換えている



④客間 壁は聚楽、建具は和紙貼りとし趣のある空間に仕上げた



⑤ダイニングキッチン 真鍮製ペンダントライトで経年変化を楽しむ



⑦アトリエの縁側 腰掛けて雑談できる場所

Before



コンバージョンの動機／設計・施工の工夫点／施主・居住者の満足度

当該建物は元々築 30 年弱の縫製工場で 10 年程前から空き家のままになっていました。お施主様は限られた予算で陶芸教室兼住居を求めており、新築では予算オーバーになり、希望の広さも確保できないことから、縫製工場をアトリエ兼住居にコンバージョンするご提案をし、今回生まれ変わった建物です。

凍害で傷んだ外壁を凍害の心配がない金属サイディングの外壁に改修、傷んだ屋根も塗装替えし耐久性の向上を図りました。

温熱環境改善のためにサッシは Low-E ペアガラスの複合サッシに入替え、開口部はコストパフォーマンスに配慮し既存開口部に合わせて配置し

住宅として確保した性能
耐久性能、温熱性能、
バリアフリー性能、防犯性能

特に配慮した事項
外壁耐久性の向上、Low-Eペアガラスの採用、サスティナビリティ

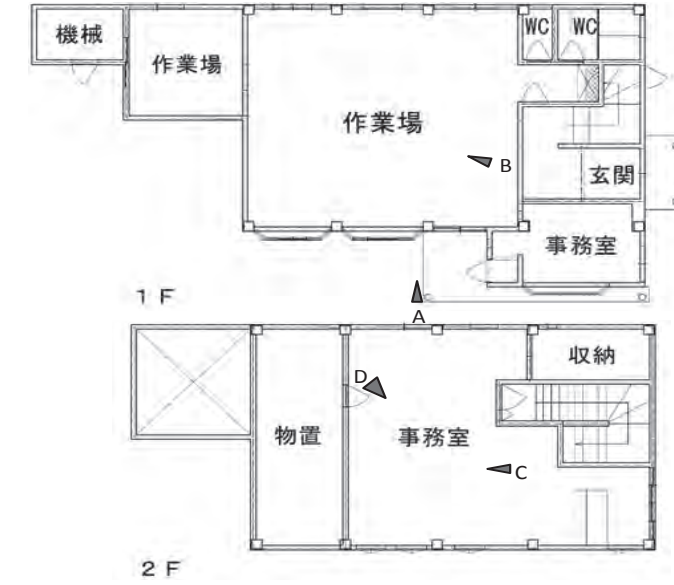
データ

所在地	山形県西村山郡河北町	新築竣工年	1991 年	築後年数	28 年	施工期間	180 日間
該当工事床面積	192.6 ㎡	／総工事床面積	192.6 ㎡	該当部分工事費	2300 万円	／総工事費	2300 万円

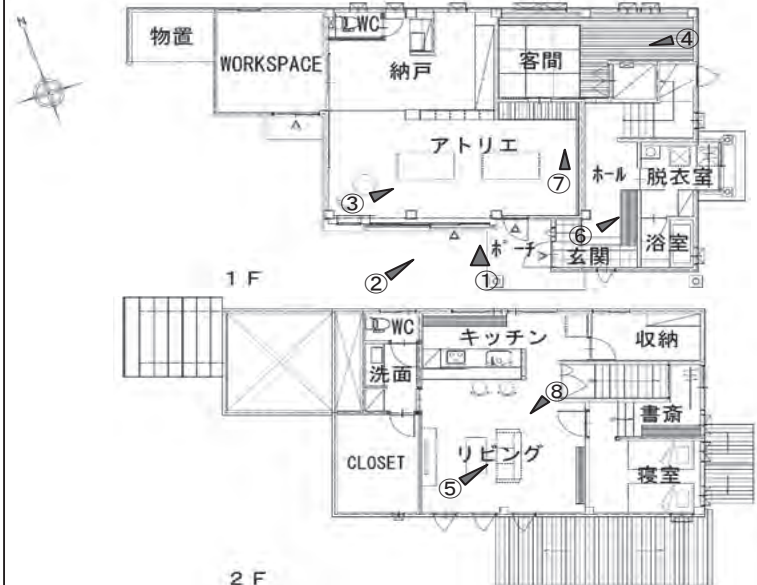
ています。内部は、無垢材をベースにして、使い込むほどに風合いを増し、味わい深くなる空間に仕上げました。アトリエの天井にはグラスウール断熱材を敷き詰め、断熱性と住居部への音漏れの低減を図っています。住居部分はバリアフリー性の観点から「高齢者等配慮対策等級3」を満たし、また老後は陶芸教室部分をリビングダイニングに改修し1階部分で生活できるよう計画しています。

地域景観悪化に繋がる空き家だった建物が、陶芸教室兼住居に変わったことで地域のコミュニティスペースになり地域の活性化に繋がりました。オーナーの人柄もあり、教室からはいつも明るい笑い声が聞こえてきます。

コンバージョン前の平面図



コンバージョン後の平面図



コンバージョン前の用途：□併用住宅/ □オフィス/ □倉庫/ ■工場/ □宿泊施設/ □その他

講評

長く空き家となっていたかつての縫製工場が、陶芸のアトリエと教室を併せ持つ住宅として再生された事例である。敷地は、山形県河北町の大きなスーパーマーケットの脇にある。建物の内外を緩やかにつなぐ1階ファサードの格子戸の奥には、施主が開く陶芸教室のアトリエが広がっている。そこは、地元の小学生が行事の際に来たり、工事に関わった職人が仲間を連れてぐい呑をつくりに来たりと、みんなが笑顔で立ち寄る地域の新しい居場所になった。陶芸作品の焼き上がりの日には、特に多くの人で溢れるという。

当初、施主は新築を希望していたのだが、設計者は予算等を考慮して既存建物のリフォームを提案した。いろいろ物件探しをした末、築30年弱、延べ床面積約200㎡の物件を、建物の解体費を差し引いた額で取得し、工事が始まった。施主の奥様は、毎週足を運んだ現場の様子を「楽しかった」と振り返る。「既存のものが予想外に変化する」、「新築にはない面白さがある」と、リフォームを選択したことに今ではとても満足しているとのことであった。

当地のような積雪の多い地域では、屋根塗装などの外部工事が施工可能な時期は限られる。そのため、積雪のある冬期の工事期間には、建物内部の工事を1人の大工が中心となってゆっくり丁寧に進めることになった。無垢材のフローリングと建具、塗り壁、そして大工と建具屋で製作した特注の家具など、自然素材で構成された空間は、夏の

暑い日でも空気は爽やかである。暖かみのある心地よい空間がつくり込まれているが、限られた予算でそれが実現できたのは、こうした工事の進め方のおかげでもある。また、奥様のための隠れ家的な空間を設けたり、施主が高齢になっても住み続けることができるように1階だけでも暮らせるような計画がなされたりと、住宅として、施主の暮らしへの配慮も細やかである。

インテリアについては、アトリエの天井には工場の照明器具がきれいに再利用されている。コンバージョンの設計では、意外な空間の創出など、新旧の用途のギャップをデザインに盛り込むことが多いが、この作品にはそうした奇を衒^{てら}うところがまったくない。まるで当初から今のあり方だったかのように、ぴったりと仕立てられた空間になっている。

外観は、凍害で痛んだセメント板を、金属系のサイディングに取り替えているが、いまや「スーパーの横の黒い建物」といえばみんながわかる、まちのシンボルとなっている。

この作品は、工場として使用されずに価値を失っていた建築物が、住まい手やつくり手の力で、住まいとして、また地域の暮らしを彩る場として、極めて高い価値を得る結果となっており、公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター理事長賞に値するものとして、高く評価される。